第5室　山梨出身・ゆかりの作家

前期展示　4月2日（土）～7月3日（日）

【ジャーナリズム】

徳富蘇峰

徳富蘇峰『烟霞勝遊記』上・下　1924（大正13）年　民友社
徳富蘇峰「推倒一世王智勇開拓萬古之心胸」軸装
藤谷みさを『蘇峰先生の人間像』1958（昭和33）年１月　明玄書房

池辺三山

池辺三山「新聞記者の地位」「山梨日日新聞」1888（明治21）年１月12日〈パネル〉

川合信水

川合信水『吾が体験の道』1925（大正14）年９月　生々社
「女学雑誌」第338号　1893（明治26）年２月「雑録」コピー

石橋湛山

『石橋湛山写真譜』1973（昭和48）年３月　東洋経済新報社

廣瀬千香

廣瀬千香『思ひ出雑多帖』1990（平成２）年７月　日本古書通信社
廣瀬千香「箸もつ筆もつたまさか針も」色紙
廣瀬千香『山中共古ノート』第１～３集　1973（昭和48）年６月～1975（昭和50）年６月

川合　仁

川合澄男『回想・川合仁』1975（昭和50）年４月　川合仁刊行会
川合仁『私の知っている人達』1970（昭和45）年10月　藤書房

望月百合子

望月百合子『大陸に生きる』1941（昭和16）年５月　大和書店
矢崎千代二 画「望月百合子肖像」
望月百合子『限りない自由を生きて』1988（昭和63）年３月　ドメス出版
「女人芸術」大阪宣伝旅行　1928（昭和３）年　写真パネル

雨宮庸蔵

雨宮庸蔵『偲ぶ草』1988（昭和63）年11月　中央公論社
永井荷風 筆・画「昼間から錠さす門の落葉かな」色紙
十一谷義三郎　雨宮庸蔵宛書簡　1933（昭和８）年８月（年月推定）日不明

竹中　労

竹中労ほか「夢よ少年懐古浅草の灯よチャンバラ時よ」色紙
竹中労『ザ・ビートルズレポート』1982（昭和57）年６月　白夜叢書
竹中労『仮面を剥ぐ』1983（昭和58）年２月　幸洋出版
竹中労『無頼と荊冠』1973（昭和48）年９月　三笠書房

【小説・評論・随筆・翻訳ほか】

相田隆太郎

相田隆太郎『テクノクラシイ』1933（昭和８）年４月　新潮社
相田隆太郎『農民文学の諸問題』1949（昭和24）年４月　甲陽書房

和田芳恵

和田芳恵『接木の台』1974（昭和49）年９月　河出書房新社
和田芳恵「蓬生日記（一葉日記）」原稿

山田多賀市

山田多賀市『耕土』1940（昭和15）年３月　大観堂書店
「農民文学」創刊号　1951（昭和26）年９月　農民文化協会
写真パネル　45歳の時の山田多賀市

新田次郎

新田次郎「富士を守れ」原稿〈複製〉
新田次郎「八ヶ岳の気象遭難」原稿
写真パネル　新田次郎（右）と上野晴信（歴史家　山梨県生まれ）

石原文雄

「中部文学」創刊号　1940（昭和15）年４月
のむら清六画　石原文雄肖像

藤巻宜城

「中央線」創刊号　1968（昭和43）年３月
「あぢさゐ」５月号　1922（大正11）年５月
「映象」第１輯　1925（大正14）年４月

中村鬼十郎

中村鬼十郎『傾斜地の村』1943（昭和18）年９月　アジア青年社
中村鬼十郎『慟哭の川』1976（昭和51）年10月　甲陽書房

熊王徳平

熊王徳平『いろは歌留多』1942（昭和17）年２月　第一芸文社
熊王徳平「美るはしく生きたい希い鳥雲に」色紙
熊王徳平『富士川』1958（昭和33）年11月　出版書肆パトリア

加賀美　実

加賀美実『畦』1984（昭和59）年４月　文化総合出版
加賀美実『恥辱の時代』1974（昭和49）年４月　文化総合出版

小林　実

小林実「皇居外苑」原稿
「講談倶楽部」第11巻第12号　1959（昭和34）年12月
小林実『白い太陽』第一部・第二部　1961（昭和36）年３月　東京信友社
写真パネル　峡日文芸社主催「山梨文芸座談会」1935（昭和10）年7月14日

鳴山草平

写真パネル　鳴山草平「甲府市の自宅で」1937（昭和12）年春
「新青年」第20巻第５号　1939（昭和14）年４月
鳴山草平「カミナリ（先生）青春帖　第六話―緑の吹く風の章」草稿

羽中田　誠

野間仁根『酔いどれ記者』挿絵原画
羽中田誠『酔いどれ記者』1953（昭和28）年12月　鱒書房

保坂義照

保坂義照『武田二十四将論』1944（昭和19）年２月　アジア青年社
保坂義照『愁風天目山』1952（昭和27）年９月　農村文化協会

小川正子

小川正子『小島の春』1939（昭和14）年４月改版　長崎書店

金子文子

金子文子『何が私をかうさせたか』1931（昭和６）年７月　春秋社
『金子ふみ子　全歌集　獄窓に想ふ』1987（昭和62）年12月　黒色戦線社

大町桂月

大町桂月「ふもとよりいたゝきまでも富士の根を背負ひてのぼる八ヶ嶽かな」扇面
大町桂月「夜をこめて落葉に雨のかゝりけり」短冊

野尻抱影

野尻抱影　小尾孝平宛葉書　1910（明治43）年５月19日〈複製〉
山口誓子・野尻抱影『星恋』1946（昭和21）年６月　鎌倉書房

平賀文男

平賀文男『日本南アルプス』1929（昭和４）年６月　博文館
「山と溪谷」第168号　1953（昭和28）年６月　山と溪谷社

寺田重雄

寺田重雄『甲州魚風土記』1980（昭和55）年12月　芸文社
「鵺　nue」終刊号（寺田重雄追悼号）1995（平成７）年10月

芦澤一洋

芦澤一洋『アーヴィングを読んだ日』1994（平成６）年11月　小沢書店
芦澤一洋『バックパッキング入門』1976（昭和51）年月　山と溪谷社
写真パネル　芦澤一洋「アメリカアイダホ州のヘンリーズフォークで」

山中共古

山中共古『甲斐の落葉』1926（大正15）年11月　郷土研究社

土橋里木

土橋里木『山梨県の民話と伝説』1979（昭和54）年７月　有峰書店
土橋里木『山村夜譚』1993（平成５）年６月　近代文芸社

大森義憲

大森義憲『甲州年中行事』1952（昭和27）年11月　山梨民俗の会

中沢　厚

中沢厚『山梨県の道祖神』1973（昭和48）年５月　有峰書店
中沢厚『つぶて』1981（昭和56）年12月　法政大学出版局

浅川伯教

「白磁」創刊号　1922（大正11）年４月
浅川伯教『釜山窯と対州釜』1930（昭和５）年７月　彩壺会

浅川　巧

浅川巧『朝鮮の膳』1929（昭和４）年３月　工政会出版部

永峯秀樹

永峯秀樹『暴夜物語』第１編・第２編　1875（明治８）年２月、５月　山城屋

矢崎源九郎

矢崎源九郎訳『アンデルセン童話名作集』1955（昭和30）年３月　筑摩書房

【童話・童謡】

大村主計

大村主計「花かげ」色紙
大村主計『ばあやのお里』1932（昭和７）年１月　児童芸術社
「楽しい童謡集」レコード盤　1959（昭和34）年　コロムビアレコード

米山愛紫

米山愛紫『春の停車場』1942（昭和17）年６月　文昭社
「チチノキ」第19冊　1935（昭和10）年５月

小野政方

小野政方『りんごののぞみ』1928（昭和3）年10月　研究社
小野政方『愛児読本』ひらかなの巻　1934（昭和９）年10月　厚生閣太田黒克彦

太田黒克彦

太田黒克彦「マスの旅」原稿
太田黒克彦『マスの大旅行』1956（昭和31）年９月　大日本雄辨会講談社

山北しげり

山北しげり『小人の踊り』1936（昭和11）年11月　宏文堂書店
「シャボン玉」1937（昭和12）年２月

塩沢　清

塩沢清『ガキ大将行進曲』1977（昭和52）年４月　旺文社
塩沢清『五年五組の秀才くん』1982（昭和57）年４月　ポプラ社
塩沢清『愛犬パックンはどこへいくの？』1992（平成４）年３月　旺文社
塩沢清『もうひとりのわたしみつけた～理香とチエリの物語～』1992（平成４）年５月　ポプラ社

【戯曲・脚本】

小林一三

小林一三『歌劇十曲』1917（大正６）年10月　玄文社
小林一三『曾根崎艶話』1948（昭和23）年10月　芙蓉書房

河野義博

中村吉蔵・河野義博『近代演劇史論』1921（大正10）年12月　日本評論社
「演劇」創刊号　1932（昭和７）年４月
写真パネル　河野義博作品の舞台写真

大木直太郎

「月水金」６　1937（昭和12）年１月
大木直太郎『大木直太郎戯曲選集』1998（平成10）年５月　陽光台OAプラザ

菊島隆三

菊島隆三・黒沢明共同脚本「用心棒」第２稿台本
「からっ風野郎」台本　1960（昭和35）年　大映東京撮影所製作

小柳津浩

小柳津浩『学校演劇論』1953（昭和28）年11月　甲陽書房
小柳津浩『青年演劇脚本集』1958（昭和33）年７月　甲陽書房
『小柳津浩脚本集　二発の銃声』1986（昭和61）年９月　山梨舞台芸術センター

竹内勇太郎

竹内勇太郎『山本勘介』第１巻　1985（昭和60）年８月　学習研究社
竹内勇太郎「赤帽母ちゃん」原稿

後期　8月30日（火）～11月30日（水）

【詩】

青柳瑞穂

青柳瑞穂『睡眠』1931（昭和６）年１月　第一書房
青柳瑞穂「玉堂の花」原稿

尾崎喜八

尾崎喜八『山の絵本』1935（昭和10）年７月　朋文堂　表紙 片山敏彦
尾崎喜八「遠い日の山小屋」原稿〈複製〉

金子光晴

金子光晴「似顔絵の似たる日秋の足の冷」色紙
金子光晴『落下傘』1948（昭和23）年４月　日本未来社

杉原邦太郎

杉原邦太郎『火山』1930（昭和５）年２月　機山閣書店
杉原邦太郎「昨日は靡（なび）く翠であった」色紙
「山脈」創刊号　1930（昭和５）年８月

内田義廣

内田義廣『花の群落』1976（昭和51）年４月　日本未来派の会

上野頼三郎

上野頼三郎『村の生活』1930（昭和５）年10月　村落社
上野頼三郎「犬のやうに」詩稿

山口啓一

山口啓一『石炭と花』1930（昭和５）年５月　機山閣書店

中室員重

中室員重『兵隊詩集』1931（昭和６）年８月　海図社

米澤順子

米澤順子「額のある静物」油彩　昭和初期
米澤順子『聖水盤』1919（大正８）年11月　東京堂書房

米倉寿仁

米倉寿仁『透明ナ歳月』1937（昭和12）年４月　西東書林
「甲府派」創刊号　1954（昭和29）年11月

宮田栂夫

宮田栂夫『仮面』1954（昭和29）年10月　甲府派発行所
宮田栂夫「オパールの変転ルビーの紋章」色紙

曾根崎保太郎

曾根崎保太郎『灰色の体質』1954（昭和29）年11月　甲府派発行所
曾根崎保太郎「酩酊が抱くフェニックスの卵黄」色紙

野澤　一

野澤一「四十一歳三月三日夜作」未定稿
「童子行」１号　1937（昭和12）年５月

津嘉山一穂

津嘉山一穂「未刊詩集」草稿

鈴木久夫

鈴木久夫「断崖」原稿
鈴木久夫『断崖』1930（昭和５）年11月　民謡レビュー社

鈴木祐之

鈴木祐之『わたしのヒロシマ』1969（昭和44）年３月　甲陽書房
鈴木祐之「心の傾きに」原稿

小林冨司夫

小林冨司夫『きいろい炎』1949（昭和24）年５月　中部文学社
小林冨司夫「地は落葉線路の枕木を一本一本渡ってゆくと満月がいたぼくは冬の満月をすぎた」色紙

土橋治重

土橋治重　詩集『花』1953（昭和28）年１月　日本未来派発行所
「風」129（終刊）号　土橋治重追悼号　1993（平成５）年12月
土橋治重「甲州は颯爽と山々が肌を脱いでいた夜は深々と星がかがやいた」色紙

中込純次

中込純次「詩集母と恋人」原稿「山茶花」
中込純次『母と恋人』1929（昭和４）年１月　国風閣

一瀬　稔

一瀬稔 筆　のむら清六 画「裏山で」軸装
一瀬稔　詩集『山鶏』1940（昭和15）年10月　中部文学社

【短歌】

伊藤生更

「美知思波」創刊号　1935（昭和10）年６月
伊藤生更『山雲』1953（昭和28）年10月　美知思波発行所
伊藤生更「北の方より駒鳳凰農鳥と我が目を移す雪の高山」軸装

中村美穂

「アララギ」第18巻第５号　1925（大正14）年５月
中村美穂『佛顔』1931（昭和６）年９月　みづがき社

相澤貫一

相澤貫一『石水集』1971（昭和46）年６月　発行人　古谷幸江

若尾隣平

若尾隣平『若尾隣平遺稿集』1971（昭和46）年１月　発行人　若尾朗

中大路佳郷

中大路佳郷「われ生れし虎年なれば病める身に渇を入れつつ初陽あみをり」短冊
中大路佳郷『華葩』1987（昭和62）年２月　須曾乃短歌会

伊藤映二

伊藤映二「朝霧」原稿
伊藤映二『揺籃時代』1926（昭和２）年10月　上田書店
伊藤映二「西行はどこら辺りで笠上げて見たであろうか赤い富士」色紙

飯野真澄

『飯野真澄歌集』1971（昭和46）年８月　白玉書房
飯野真澄「広き田の南寄りに黒牛は立ちて居るなり代掻を止めて」色紙

青木辰雄

青木辰雄「六階の食堂にゐてややややに茜うするる時を過ごしぬ」短冊
『青木辰雄歌集』1988（昭和63）年８月

相澤　正

『相澤正歌集』1954（昭和29）年１月　白玉書房

許山茂隆

許山茂隆「病院に歌のメモ帖持ちゆけどけふも空白のまゝ持ちかへる」色紙
許山茂隆『郷園』1947（昭和22）年７月　国民文学社

鈴木　孝

鈴木孝「丘の上の枯桑原に鳴る風のいく日吹きなば春や来向かふ」軸装
鈴木孝『丘のある街』1966（昭和42）年10月　甲陽書房
「樹海」創刊号　1954（昭和29）年７月

佐野四郎

佐野四郎『杉の花粉』1934（昭和９）年７月　朝日書房
佐野四郎「地に生くるなべてをいたはる如くにもいわし雲しづかにそらおほひくる」軸装

渋谷　俊

渋谷俊『華鬘』1939（昭和14）年４月　柳正堂書店
与謝野晶子「序に代へて」歌稿（渋谷俊『華鬘』所収）

渋谷玻瑠子

渋谷玻瑠子『無礙の光』1929（昭和４）年12月　柳正堂書店

茂手木みさを

茂手木みさを『一隅の薔薇』1930（昭和５）年４月　朝日書房
写真パネル　1933（昭和８）年、与謝野寛、晶子夫妻来県の折

【俳句】

今村霞外

今村霞外『法燈』1954（昭和29）年８月　私家版
今村霞外「初汐にのりて美しすて扇」短冊

五味洒蝶

五味洒蝶『洒蝶句集』1964（昭和39）年９月　雲母社
五味洒蝶「寒曝をみる人まれに石叩」短冊

辻　蕗村

辻蕗村『樹影』1973（昭和48）年７月　雲母社
辻蕗村「冬の雲その白きゆえ弧なりけり」色紙

榎本虎山

榎本虎山「蛍ゐていのち静かに露を染む」短冊

角田雪弥

角田雪弥『畦火』1987（昭和62）年７月　竹頭書房
角田雪弥「竹の葉によすがのひかり冬の水」短冊
角田雪弥「月代の蛇籠をくぐる水の音」色紙

山田岫雲

山田岫雲『朴の花』1975（昭和50）年11月　発行　山田武雄
山田岫雲「冬雲に親子遠しや山畑」一枚物

柏木白雨

柏木白雨『白雨句集』1977（昭和52）年７月　若葉社
柏木白雨「新蕎麦会句会記」1942（昭和17）年８月22日

鈴木青処

鈴木青処「祖母のゐて紅梅莟む子の娶り」短冊
山口青邨選「稿本青処句集」

堤　俳一佳

堤俳一佳『俳一佳句集』1951（昭和26）年４月　裸子発行所
堤俳一佳「電話より文に情あり後の月」短冊

加賀美子麓

加賀美子麓『火度』1987（昭和62）年８月　牧羊社
加賀美子麓「川千鳥月より鳴いて落ちにけり」色紙

赤堀五百里

赤堀五百里『萬里』1995（平成７）年５月　読売・日本テレビ文化センター
赤堀五百里「淵明も李白も来よや屠蘇酌まむ」短冊

石原八束

石原八束「露の彩動き赤富士現しけり」色紙
石原八束『秋風琴』1955（昭和30）年８月　書肆ユリイカ　題簽 石原舟月

新免一五坊

新免一五坊「冬日とははうふつとしてある思ひ」短冊

【川柳】

篠原春雨

篠原春雨「三階の一間に小僧病んでゐる」色紙

中沢春雨

中沢春雨「団十郎日本一の目玉なり」短冊
『騒愁　中沢春雨川柳句集』1967（昭和42）年11月　甲陽書房

雨宮八重夫

雨宮八重夫『遍路美知』1977（昭和52）年９月　サンケイ新聞社
雨宮八重夫「一本の道あり明日へひた行かな」色紙

田中浮世亭

田中浮世亭「浮世亭句抄」

【漢詩】

香川香南

香川香南『香南詩鈔』1926（大正15）年11月

村松蘆洲

村松蘆洲「送兒定孝之瑞西」漢詩色紙
村松蘆洲『蘆洲詩集』1980（昭和55）年５月　発行人　村松定孝

笠井南邨

笠井南邨 撰　土屋竹雨 評『翰墨縁』詩稿・印譜

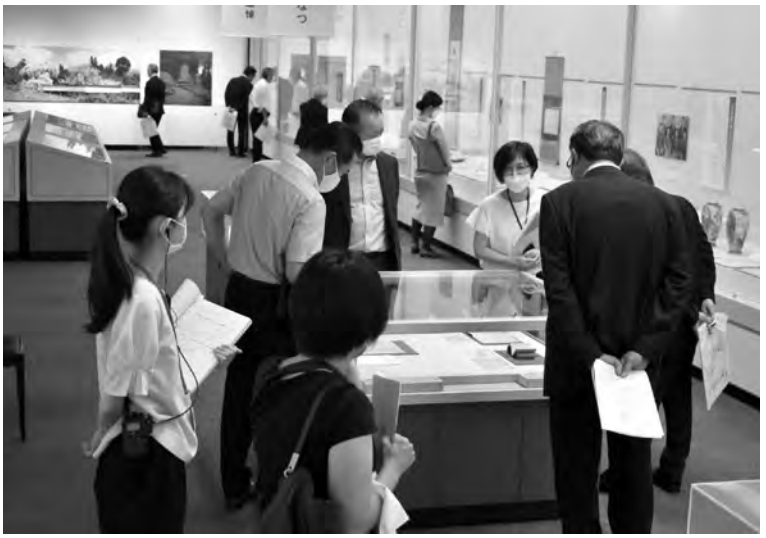
⑵ 企　画　展

企画展「樋口一葉　生誕150年　我が筆とるはまことなり
ー もっと知りたい樋口一葉」

期　間　令和４年９月17日（土）～11月23日（水･祝）　59日間

趣　旨　日本の近代文学史にその名をとどめる樋口一葉（1872～1896、本名　奈津）は、令和４年に生誕150年を迎えた。両親は現在の甲州市塩山出身で、そのゆかりは「ゆく雲」など山梨を舞台にした小説にも見出すことができる。一葉は、明治期前半の東京に生まれ育ち、萩の舎塾で日本の古典文学と和歌の素養を身につけ、父亡きあとは小説家への志を抱き、母と妹との生活を支えつつ執筆に励み、「たけくらべ」「にごりえ」などの名作を生み出した。24年余りの短い生涯に残した小説や日記からは、一葉が日本の政治や社会の問題に関心を持ち、真摯に見つめていた様子が伝わってくる。それは、格差や性差別などの問題を抱える現代の私たちの共感を呼び、新たな示唆を与えてくれる力をもっている。本展は、小説の草稿・未定稿、書簡、和歌の詠草などから、あらためて一葉の生涯と文学の魅力を紹介した。「現代の視点から」のコーナーでは、都留文科大学国文学科古川裕佳教授とゼミの学生が、「たけくらべ」の美登利が現代の言葉でTwitterに投稿している画面や、一葉の手紙の現代語訳などを作成し、パネル展示を行った。

展示構成　父と母の故郷中萩原村／武士の地位を手にして／一葉誕生／萩の舎入門／父則義の死／小説の道を志す／経つくえ／うもれ木／文学界の人々／竜泉寺町の日々／奇蹟の十四か月／たけくらべ／ゆく雲／一葉から甲州への手紙／にごりえ／歌人　樋口なつ／晩年の一葉／一葉逝去／樋口邦子「一葉略伝」／一葉女史碑／現代の視点から



樋口なつ
逝去・追悼

逝去・追悼

現代の視点から